

[朝鮮の美術展によせて]

李朝の契会図について

契会図とは李朝時代前期に流行した一種の記録画で、その特異な形式は朝鮮だけのものです。その典型的な形式は縦長の画面の最上段に、右から左に絵の題目、つまり契会の名称が漢字で、しかもおおくの場合は篆書で書かれ、その下の中段には契会の場面が山水を背景に描かれ、その下段には契会の参席者たちの名前・字・本貫・階級・官職などを記した座目が配されたものです。契会図はその制作動機は点からしても、本来備わっている座目が失われない限り、制作時が大抵明らかでないため、背景となっている山水表現が山水画の様式年代をうかがう上で重要な手懸りとなるのです。李朝前期から中期に至る間の代表的な作品を4点取上げて、制作年の古い順からその様相を見てみましょう。

図1の「読書堂契会図」(1531年頃の作、絹本淡彩、91.5×62.3cm、日本・個人蔵)は張玉(1493~?)、林百齡(?~1546)、周世鵬(1495~1554)など、1516~30年の間に賜暇読書した12名の学者達が参席した漢江の河畔での契会を描いたものです。賜暇読書とは李朝時代、若い文臣中、徳と才のある者を選んで休暇を与え、読書に専念させた制度です。本図は李朝前期の典型

的な形式に則った作例ですが、契会の描写は間接的で、読書堂を河ごとに遠望し、参席者12名は河上の船中に配しています。絵は近景・中景・遠景の三段から成り、その各々が水平に広がる安定した構図法です。その幅広い水面と霞におおわれ、処々に見える建物の屋根によって示唆される広い空間、山や土坡の処理に用いた特異な皴法(短線点皴)など、この画面からは16世紀前半期に特有な絵画様式が窺われます。読書を何よりも大切にしていた当時の文官、しかもそのエリート達の文雅な生活の一面が語られている作品です。

図2の「司饗院契会図」(1540年賛、絹本墨画、86.0×56.2cm、日本・個人蔵)は当館が昨秋に開催した特別展「李朝絵画」で初公開された作品です。上段にはこの絵の題目「司饗院契会図」が書かれ、中段には河岸に建つ一樓で行われた契会の様子が、漢江と推測される大河とその対岸の山々を背景にして大観的に描写され、その下段には鄭士龍(1497~1572)によって賛文が書かれています。中段の契会の場面描写と下段の座目の間に賛文が大きなスペースを占めて書かれているのは例外的なことで、賛文は契会の図上に書かれるのが

普通です。鄭士龍は第十一代中宗、第十二代仁宗、第十三代明宗、第十四代宣祖の四代に仕えた文才豊かな名臣ですが、この賛文を中宗35年(1540)に書いたことが判かります。そして最下段にはこの契会の参席者を細かく記した座目が配されています。司饗院とは宮中におけるすべての食膳を掌った官署で、食膳に必要な諸材料の調達や御用および宮中用の器皿の焼造なども管掌しました。座目によればこの契会には12名の司饗院の官員が参席し、契会の目的は鄭士龍の賛文によれば単なる飲食を楽しむ宴会であったと思われる。『湖陰雜稿』の著書を遺し、年80、官職領中樞の高官にして没した鄭士龍はこの時若く44才で、司饗院とどのような関わりをもっていたのかは未だ明らかではありません。この作品は1540年当時の実景山水の画風を知らせる貴重な絵画資料であるとともに、李朝陶磁史の重要な研究資料にもなり得るものと思われます。

図3の「科挙恩榮宴図」(1580年作、絹本著色、118.5×105.6cm、陽明文庫蔵)も当館の昨秋の特別展で初公開されましたが、本図は宣祖13年(1580)における謁聖試の及第者が国王から賜った恩榮宴の光景を彩色でもって精密に描いたものです。現状では題目が見られませんが、図中には当時の試験官であった領議政朴淳、右議政姜士尚、戸曹判書金貴榮、左副承旨洪聖氏のような名士が見え、さらに新及第者の中には後に朝野の指

導者となった李恒福、尹明善などの若かりし日の後姿が見られるなど、重要な歴史資料でもあります。画面上部には宮中における祝宴の様子が描かれ、その下段には参席者、文科及第者12名と、武科及第者38名の座目が配されていますが、本図のような科挙に関わる契会図の遺例は稀少です。また祝宴の図からは宮中の音楽や舞踊など、李朝時代の芸能史の研究資料も多く読みとれる筈です。

図4の「助羅浦南峰觀海図」(1586~7年作、絹本墨画、98.0×58.0cm、日本・個人蔵)は李朝の契会図の多様性を示す一例です。題目に見られる「助羅浦」とは慶尚南道の巨濟島にある港で、古くから水軍の基地、即ち軍港でした。本図はその助羅浦の南峰で慶尚道觀察使兼兵馬水軍節度使の柳永立(1537~99)ほか12名が觀海、即ち海防のための軍議を行った折の記録画なのです。柳永立は1586年8月7日から翌年8月19日迄の1年間、慶尚道觀察使を務めていたので、本図はその間に制作されたこととなります。この海防のための軍議が開かれた5・6年後に豊臣秀吉による朝鮮侵略、文禄の役が勃発する訳です。

このように李朝の契会図は記録画という性格上、例え鑑賞絵画のもつ美術的価値が多少低い場合でも、文官や武官の公的生活の一面や、歴史上の様々な出来事を具体的に知らせる史料としての価値を十分にもっているのです。

(吉田宏志)

図1 読書堂契会図
國會契會圖

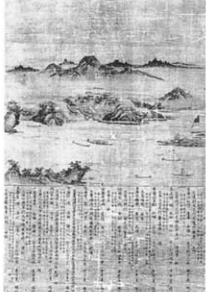


図2 司饗院契会図



図3 科挙恩榮宴図

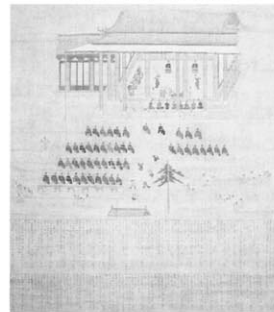


図4 助羅浦南峰觀海図

